

最強の女傭兵は

魔物の仔を孕みたい

……いまは魔の山と恐れられているヴェルアニア山に、「魔物」が棲みついたのがいつ頃か、実は定かではない。五年前という者もいれば、一〇年前だという者もあり、あるいはもっと前から棲みついていたと証言する者もいる。証言に隔たりがある理由はヴェルアニア山が人里離れた山奥に位置するためと、魔物が積極的に人を襲おうとしなかったからである。魔物は醜悪でおぞましい姿形をしていたが、人間側が敵意や害意を向けなければ攻撃してこなかったため、人々は無関心を貫くことができていたのだった。

その事情が変わったのは三年前のことである。王国が実施した調査にて、ヴェルアニア山に大規模な金鉱脈があることが判明すると、棲んでいる魔物の存在が邪魔になった。金鉱開発の障害になると判断されたのだ。

すぐに大規模な討伐隊が編成され、ヴェルアニア山に派遣された。しかし、討伐は、すぐに頓挫することになる。

魔物を討伐するため、二〇〇人から成る重装歩兵や、モンスター・ハントを専門とするギルドから一〇〇人を超える狩人が派遣されたにも関わらず、ヴェルアニア山に棲む魔物を倒すことができなかったのだ。魔物の首に高額懸賞金が掛けられて、大金目当てに腕利きの賞金稼ぎや冒険者が数多くヴェルアニア山を登ったが、彼らの努力が報われることはなかった。全戦全敗。死者がひとりも出なかったことが奇跡といわれたが、それは魔物の強さを証明したに過ぎないという辛辣な意見もあり、かくして金鉱開発は頓挫することとなり、その恩恵に沸いていた麓

の村には悲壮な空気が漂うことになった。

麓の村にある唯一の酒場には、村人たちが寄り集まり、安い酒を飲みながら、口々に陰鬱な愚痴を言い合っていた。

「……まったく、魔物のせいでこの村は寂れたままだ。せつかく金鉱が見つかったっていうのに、掘れないんじゃないやあどうしようもねえ」

「ああ。まさに絵に描いた餅だな」

「それにしても……さつき酒場を出てった女、すげーイイ女だったな。ここらじやまずお目にかかれねえっぴんだった」

「確かに。美人で、胸もでかけりや尻もでかった。格好からして、傭兵か冒険者みたいだったが、ありや踊り子か娼婦の方が似合ってたな」

「いかにも犯してくれて露出具合の装備だったしな」

「なんだ、おまえら知らないのか？ あいつは有名な女傭兵のスカールェットだよ。なんでも、ヴェルアニア山に棲む魔物を退治しに来たんだそうだ」

「マジか！ そりゃ期待できるな！」

「ん？ 誰だよ、そのスカールェットって奴は？ 有名な人なのか？」

「なんだおまえ、知らないのか？ 傭兵スカールェットっていやあ、王国で一番腕が立つことで有名な女戦士だぞ。年齢はまだ二十歳そこそこの小娘らしいが、その経歴が凄まじい」

「そうそう。噂によると何処かの貴族の出らしいが、一三歳で騎士として名を馳せてから、単独でオーガロードを討伐したり、ゴブリン族を殲滅したり、有名なところだとコロシウムで前人未到の一〇〇〇勝を上げたって記録もあるほどだ」

「すげーな、そりゃ」

「他にもスカールェットに関する噂は色々あるが、とにかく強いことで有名だ。あの女なら、もしかしたら魔物を討伐してくれるかも知れないな」

そう言って、男は酒を一気に飲み込んだ。久しぶりに美味しい酒だと彼は思った。

女傭兵スカーレット。本名をスカーレット・リブ・ローザという。年齢は二一歳。噂の通り大貴族ローザ家の出身である彼女は、とある目的を内に秘めて、騎士から冒険者へと、冒険者から剣闘士へと、剣闘士から傭兵へと転職を重ねながら、戦場から戦場へと転戦を繰り返し、数多の強敵を打ち倒しながらその名を馳せてきた。

その彼女が今回、標的としたのがヴェルアニア山に棲むという魔物であつた。

噂の魔物も、自分にとってはこれまで倒してきた多くのモンスターと同じに過ぎない——そう思っていたかも知れない。いや、そう思っていたに違いない。そう、勝敗が決する、その時までには……。

＊

……傭兵などという武骨な職業に就いているにも関わらず、スカーレットが美しい女性であるという事実は、彼女を目にした万人が認める共通の認識だと言つてよいだろう。

スカーレットは美しい。まだ若干の幼さが残る容姿は端麗にして秀美であり、目鼻立ちがはつきりとしていて、特に瞳は特大のエメラルドを彷彿とさせるものがあつた。髪はクセのある豪奢な金髪で、身長は平均水準かそれよりも少しだけ高く、その反面、女性の象徴である乳房や尻は平均を大きく逸脱した豊かさを誇っていた。だが、特筆すべきはその肌であろう。一三歳で初陣を迎えて以降、彼女はこれまで数多くの戦場を渡り歩いてきた。そしてそこで激しい戦いを繰り広げ、数百数千の敵を葬り散らしてきた。にも関わらず、その身体には、一切の刀傷どころか小さなアザさえなく、白い美しさを保ったままなのだ。これは彼女の強さを証明してやまぬ実績であり、もし仮にだが、いまずぐドレスに着替えても、貴族の令嬢として社交界で充分に通用したはずである。そうなれば、まるで花に群がる蝶のように、貴族の若者たちが彼女目当てに

わらわらと集まってくるに違いなかった。

スカーレットは美しいだけでなく強い女性である。戦場では負けなしで、単体戦でも多体戦でも無敵の強さを誇ってきた。そう、たとえ相手が人外の種族であろうとも、オーガロードも、ゴブリン勇者も、おぞましい触手の集合体であるグラン・ローパーも、再生能力と強い生命力を有するスライム・キングも、厄災の権化と称されしドラゴンですら、彼女の敵ではなかったのだ。

その彼女がいま、地面に膝をつき、剣を手放して倒れ込んでしまっている。口から胃の内容物を吐きながら、顔に困惑の翼を広げながら。

「が、がはッ、がッ、ぐげえ……」

四つん這いの状態から、どうにか立ち上がろうとしているのか、手と足に力を込めているのが端から見てもわかる。しかし、立つことができない。先ほど腹部に炸裂した一撃があまりにも強力だったため、身体がまるで言うことをきかないのだ。

「な、なんて強さ……なんて……」

小さな口から動揺の声が漏れ響いた。顔から滲み出た汗が頬を伝い、滴り落ちる。腹部はなおも強く激しい痛みを発し、身体がガクガクと震えて動かない。動けない。

ズンッ、という地鳴りにも似た音が響いたのは、この直後である。それは、彼女をこんな目に遭わせた張本人が一步前に踏み出した音であった。

「女、才前ハナカナカ強カッタゾ。ソレニヨク戦ッタ。ダガ、モウ立チ上ガルコトハデキマイ。イイ加減、負ケヲ認メテ我ニ勝テヌト悟ルガイ」

恐ろしい声が響き、スカーレットの鼓膜を突いた。

「あ、ああ、ああ……」

スカーレットが、汗でぐっしりと濡れた顔を上げた。

彼女の目の前に、巨大な魔物が立っていた。そして、負け犬と化した

スカーレットを、まるで衰れむような眼差しで見下ろしていた。

「断言シテヤル。何度挑ンデモ、才前ハ我ニハ勝テヌ。モウ諦メロ」
諭すような口調で、魔物が言った。

魔物は巨大だった。そして、醜悪だった。人の形をしているが、その肌はまるで火傷を負ったようにケロイド状に膿爛れており、身体の色はグロテスクな色彩を帯びていた。腕は太く、足も太いが、よく見ると、腕は何本もの触手を束ねて辛うじて腕の形を保っている状態で、その先端はどれも卑猥で歪な形をしていた。だが、身体よりも特筆すべき点はその顔であろう。魔物の顔は醜悪だった。魔物は人間の顔を焼いて潰したような面をしており、この魔物と比較すれば、オークやゴブリンを美男子と間違うほどであったに違いない。美しいスカーレットと比較すれば、その差はまさに雲泥であり、天と地、あるいは月と石ころほどの違いがあった。

「ああ、ああああ……」

スカーレットの口から、また震えた声が漏れ響いた。

魔物と、視線が宙でぶつかったからに違いなかった。

「フフ、典型的ナ負け犬ソノモノダナ……」

魔物は慣れていた。スカーレットのいまの有り様は、彼が倒してきた多くの人間たちと同じ反応だったからである。勇んで戦いを挑んできても、いざ敗北すると、恐怖で身体が震えて動けなくなり、死を覚悟して絶望した表情で意味もなく言葉を発するのだ。これまで何十回、何百回と見てきた有り様だった。少なくとも、いまのスカーレットを見て、魔物はそう判断を下した。

だからこそ、彼がとった対応も、いつも通りのものだった。

「安心シロ。命マデハ取りハセン。ダカラ山ヲ下リタラ、モウ二度ト――」

魔物が、そこまで言ったその時である。

「あああああああなたこそッ！ わたしの運命のヒト！」

声がした。下の方から。

「————ハ？」

その声の主を、魔物は見ていた。見ている目の前で、その発言が成されたのだ。

しかし、問わずにはいらなかった。

「エ……イマノ言葉、才前ガ言ッタノカ……？」

スカーレットが元氣よくそれに応じた。

「は、はいッ！ あなたこそッ、わたしの運命のヒトッ！ 白馬の王子様ッ！ そして、旦那さまですううううッッ！」

感極まったといった声質で、喘ぎ声のような嬌声を発するスカーレット。興奮しているのか、頬が若干紅く染まっており、肩が上下に揺れている。そしてその目には、ハートのマークが浮かんでいるようでさえあった。

「エ、エ、エエ……」

魔物は明らかに困惑していた。自分の中にある経験や常識では対応できない事態に直面して、思わず一歩後ずさった。

「イヤ、才前……何ヲ言ッテルンダ、イッタイ……」

「ああッ、申し遅れました、旦那さまッ！」

「旦那ジャネエシ！」

「わたしの名前はスカーレット・リブ・ローザ」

「ヒトノ話ヲ聞ケッ！」

「あなた様の妻です！」

（意味ワカンネエエエエエエエエエエエエッ！）

魔物は混乱している。明らかに動揺している。そして大困惑しているようだ。

その一方で、スカーレットは興奮していた。それはまさしく大興奮といっても過言ではない興奮の度合いであって、狂喜と歓喜に満ち充ちているようでさえあった。

そのスカーレットが立ち上がり、まるで生ける屍を彷彿とさせる動きで、魔物に近づき、抱きつこうとした。

魔物は慌てて後ろに飛びすさり、スカーレットの攻撃を回避した。

「チョ、チョッ、チョット待テ。オ前、何処カ頭デモ打ツタノカ？ 腹ヲ殴ツタ時モ手加減シタハズダゾ？ モシヤ、オカシクナツテシマッタノカ？」

「いいえ旦那さま、スカーレットはまともです。何処も悪くはありません！」

「何処ガダ！ ドコカラドウ考エテモオカシイダロウガッ！」

特に頭がッ！ とはさすがに言わなかったが、十分、否、それ以上に、スカーレットの頭がおかしいという事実は、その言動から見ても明らかである。

「ト、トニカク、マズハ落ち着ケ。ソシテ最初カラ説明シロ。オ前ハイッタイ、何処の何者デ、イッタイゼンタイ何ヲ考エテイルンダッ！」

「あ、はい、実はカクカクしかじかで——」

「端折ルナアアアアアアアアアアアアアッ！」

魔物は泣きそうになった。

それはともかくとして、どうにかこうにかしてスカーレットから聞き出した話を要約すると、次のようにまとめることができた。

曰く、

「自分よりも強い男の妻となり、その子を孕む」
こと。

このたったひと言を聞き出すために魔物が費やした時間はなんと三時間半。その間、魔物はスカーレットからここに行き着くまでの苦労話を延々と聞かされてげんなりとしていた。

スカーレットいわく、彼女がこのような願望を抱いたのは幼少期の頃だという。母親から寝物語として聞かされた勇者アルシスの伝説に感動した彼女は、いつかアルシスのような強い男と結ばれることを夢に見る

ようになったのだそうだ。そこまでであればどこにでもいる少女の他愛のない夢物語に過ぎないのだが、問題はスカーレットが尋常でない強さの持ち主であったという点だ。

自分よりも強い男を求めて、スカーレットは様々な職業に身をやつしながら戦場から戦場へと転戦を繰り返してきた。それは全て自分の願望を叶えるための行動だったのだが、出会う男は人外種も含めて自分よりも弱いモノばかり。ゆえに、無意味に勝利を重ねてゆくごとに、失望と絶望の水位が上昇していったのだそうだ。

「もしかしたら、自分は運命のヒトに出会えないのではないか……」
そう思っていた矢先、出会ったのがヴェルアニア山に棲む魔物だったという。

魔物に生まれて初めてとなる敗北を味わって、スカーレットの胸はときめき、身と心は歓喜にうち震えたそうだ。

スカーレットは感動の眼差しを魔物に向けて、まるでオペラでも歌うような調子で想いの丈をぶちまけた。

「やつと、やつと出会えました！ 幾多の苦難困難を乗り越えて、わたしは運命のヒトを見つけることができました！ ああ、神さま！ ありがとうございます！ わたしを運命のヒトへと導いてくださって！ よかった、諦めなくて、本当に良かった！」

瞳にハートの色を浮かべながら、興奮した様子で踊り狂うスカーレット。

そんな彼女に目をやりながら、げんなりとした様子で魔物は思わずにはいられなかった。

（ナンテ……迷惑ナ……）

陰鬱な気持ちでため息を吐きながら、喜び狂っているスカーレットに遠い目を向ける魔物。彼にとっては本当に迷惑な話であった。

この山で、誰にも迷惑をかけずに静かに暮らしていただけなのに、なぜかここ近年、やたらと討伐者がやって来て迷惑していたところへ、こ

の厄災の登場である。神の悪意を感じずにはいられなかったし、悪魔の悪戯を恨まずにいられなかった。

「――ッテ、ナゼ服ヲ脱グッ！ 服ヲッ！」

魔物が遠い目で考えごとをしていた最中、喜び狂っていたスカーレットがとんでもない行動に移っていた。なんと、着ていた服を脱ぎはじめ、いつの間にか下着姿になっているではないか。

「え？ なぜって……もちろん、夫婦の営みをするためですわ」
ポツと頬を紅く染めながら、恥ずかしそうに言うスカーレット。

魔物は思った。

（コノ女ノ頭ニハ、ウジデモ湧イテイルンジャナイカ……）
と。

そんな魔物の呆れ果てた表情を見て、スカーレットは、なにを思ったのか、あるいはなにを勘違いしたのか、突然、見当違いなことを言い出した。

「大丈夫ですわ旦那さま！ わたし、容姿は気にしませんから！ だって、真実の愛に必要なのは、人種でもなく、醜美でもなく、肌の色でもなく、種族の違いでもなく、強さと性別だけですからッ！」

「……」

開いた口が塞がらないとはまさにこのことであろう。

魔物は心の中で呟いた。

（何ヲ言ッテイルンダ、コノ女ハ……）

魔物の理解の範疇の外で、スカーレットの暴走はなおも激しさを増す一方だ。衣服を脱ぎ捨てた彼女は、ついに下着まで脱ぎ捨てて、白い肌を露出した一糸まとわぬ全裸姿になってしまった。平均水準よりも遥かに大きな乳房も、果肉たつぷりの朝桃のような臀部も、筋がびったりと閉じた貝のような秘部も、全てを曝け出した状態で、これ見よがしに魔物に美体を見せつける。それも自信たつぷりといった様子でだ。

「どうです、見てください旦那さま。このわたしの身体を！ この大き

な胸も、お尻も、もちろんアソコも、頭の先から爪先にいたるまで、すべて旦那さまのモノ、所有物です！　ですから、どうぞ好きなように堪能し、ご賞味くださいませ！」

「……………」

「あ、もちろん処女です！」

（聞イテナイ、ソンナコトハ…………）

魔物は呆れた。

冗談抜きで、本当に呆れ果てた。

これまで、戦いに敗北した人間が命乞いをしてきた例は幾度となく目にしてきたが、求婚された経験は初めてだった。戸惑うというよりも恐怖すら覚えるこの状況に、魔物は脳ミソをフル回転させて熟考した結果、説得の方針を転換することにした。

押してダメなら引いてみる、という訳ではないが、この頭のおかしな娘には何を言っても無駄だと悟った魔物は、あえてスカーレットの狂言に乗ることでこの窮地を脱しようと思い立った。その方が、この娘も諦めるだろうと思ったから。

「…………ソウカ、才前ハドウシテモ我ト夫婦ニナリタイト申スノカ？」

「はい、そうです！　その通りです！」

「ソウカ…………シカシ、ソレニハ少シ問題ガアルゾ」

「え、それはいったい…………」

「ナニ、単純ナ話ヨ。夫婦ニ成ルノデアレバ、才前ハ我ヲ受け入レネバナラヌノダゾ」

「はい、それはもう、わかっております！」

「イヤイヤ、ワカッテオラヌ。才前ノ小サナ身体デハ、我ノコレヲ受け入レルノハイササカ無理ガアロウ」

そう言っただけで魔物が突き出したのは、股間からそそり立つ、硬く勃起した、巨大なイチモツであった。その大きさをや、樹齢百年の樹木のような太さであって、長さはスカーレットの身長よりも大きかった。

「くくくくッッッ！」

スカーレットの驚愕した表情を見て、魔物は勝ち誇った体で言った。
「夫婦ノ営ミトイウカラニハ、才前ハ我ノコレヲ受け入レ、満足サセネ
バナランノダゾ。デキルノカ、ソノ小サナ穴デ？　ン？　マア、無理デ
アロウ。ダカラ潔ク諦メテ——ッテ、オイ、何ヲシテオルンダ、何
ヲ……」

恍惚とした表情を顔に浮かべながら、スカーレットが魔物の剛直に手を伸ばし、涎を垂らしながら呟いた。

「ああ、なんて立派なモノ——硬くて、太くて、逞しくて、雄々しくて、まさに強き男の象徴のような立派なイチモツ。ああ、ああッ！　こ、これを……これを、わたしの中にぶち込んでくださるのですね……」

「イヤ、ソナコトハヒト言モ言ッテナイノダガ……」

と、魔物が言っているそばから、スカーレットは腹を上に向けたメス犬の服従ポーズで地面に寝転がり、貝のように閉じていた秘穴を自らの手でくぱぁッと開け広げた。薄っすらと膜が張っているその穴は、興奮のためか、すでに溶けたチーズをぶち撒けたように熱くドロドロの状態になっており、ツーツと粘液が糸を引いて滴り落ちた。

その雫を、スカーレットは華奢な指ですくい取ると、口元に近づけ、舌で舐めとり、甘く艶の入った声で魔物に向かって囁いた。

「旦那さま、スカーレットの準備はもう万端です。その雄々しきイチモツを、わたしのこのはしたない淫ら穴にぶち込んでください。そして、そして……欲望赴くまま、突いて突いて突きまくってくださいませッ！」

その言葉を聞いた瞬間、魔物の頭の中で、ブチリと何かが切れる音がした。

（モウドウニデモナレ……）

言っても聞く耳をもたず、会話も成立しないのであれば、もうどうしようもない。後はもう、なるようにしかならないのだから。

「……ワカッタ。ナラバ覚悟シロ」

そう言つて、魔物は巨大なペニスの先端を、スカーレットの小さな穴に押し当てた。単純に考えて、この巨大なイチモツが入るとは思えない。否、たとえ挿入することができたとしても、女の身体が無事に済むとは思えない。不殺こそが魔物の信念であつたが、これはもう仕方のないことなのだ、彼は自分に言つて聞かせた。

ぐちゅッ、という音がして、スカーレットの身体に微弱な電流のような衝撃が走り、背筋がゾクゾクと震えた。

「ああッ、旦那さまの逞しいイチモツと、わたしのアソコが接吻している……ああ、ああッ、早く、早く挿入てください旦那さ——」

と、スカーレットが蕩けるような表情で言葉を紡いでいた途中だった。

ズドオムツ！

何の前触れも無いまま、前戯すらないまま、魔物の巨大ペ○スが、まるで破城槌のような勢いで、スカーレットの秘穴の中に挿入されたのである。その瞬間、処女の膜が破れて純血が飛び散り、スカーレットの腹部がペ○スの形にボコツと大きく膨れあがった。そして、彼女の口からは、雷鳴のような咆哮がほとばしったのである。

[illegible]

姦通のあまりの衝撃に、身体が仰け反り、目が大きく見開いて、悲鳴が裏返るスカーレット。挿入された魔物ぺ〇スは、子宮を内臓ごと押しこめ、重く鈍い痛みを腹部全体へと走らせ行き渡らせた。

[illegible]

「は、初めて、でしたので……少し、驚いただけですの……も、もう、慣れましたから……ど、どうぞ、欲望赴くまま、動いてくださ
い……」

そうやってスカーレットはにこりと微笑んだ。

$$\left[\begin{array}{c} \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \\ \bullet \end{array} \right]$$

魔物は苦い顔をして、小さくため息を吐いた。

それは、彼なりの決意の行為であつて、その直後、魔物がゆつくりと腰を動かしはじめた。

ズツ、ズブツ、ズブヌヌヌヌウ……。

「おッ、おッ、オッ、おツツぐうううううううううううううううううううう……ッ！」

スカートの隙間に挿入されていた巨大ペ○スが、湿り気を帯びた音と一緒にずりりと引き抜かれ、それに伴ってペ○ス状に大きく膨らんでいた腹部がベコリとへこんだ。

腹部を襲っていた途方もない圧迫感から解放されて、スカーレットは少しの間だけ安堵の空気を味わうことができた。

「はあ、はあ、はあ……」

しかし、それは束の間だった。

血が混じった愛液が滴り落ちる間もなく、魔物の巨大な肉棒が、スカーレットの膣内めがけて、勢いよく再挿入されたのである。今度は先ほどよりも深く、より奥まで。

ズドオオムツ！

[illegible]

スカートの腹部が再び○スの形に大きく盛り上がり、膨らんで、

大きく開け放たれた口から絶叫がほとばしった。その声を聞きながら、魔物がスカーレットに静かに告げた。

「望ミ通り犯シ尽クシテヤル。覚悟シロ」

その言葉を合図にして、魔物が腰を激しく振りはじめた。

ズグツ、ズブツ、ズグツ、ズブツ……。○

湿り気を帯びた音を響かせて、膺壁から滲み出る愛液を飛び散らせながら、魔物がペニスの前進と後退を繰り返す。そのつど、スカーレットの腹部が、魔物のペ〇スの形に大きく膨らみ、べこりとへこむ。肉棒が突き上げる衝撃が内臓全体に響き渡り、鈍痛が脊髄を駆け上がって頭頂部から突き抜けていくつど、スカーレットの口から叫喚がほとばしり大気に轟いた。

「んツギイ いいいいいいいいいいいいいいいい
 イイイイツツ！ しゅ、しゅごいッ、しゅごいいいいいい
 いいいいいいいいいいいいいいいいいいいい
 ああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああ

苦しんでいるのか、それとも喜んでいるのか、あるいはその両方か。いずれにせよ、魔物のペニスが胎を激しく突くつど、半ば白目を向きながら、舌をダラリと口から垂らし、感極まった絶叫を放つスカーレット。その表情には笑みの成分が含まれており、何処と無く幸せそうな気配を漂わせているのだが、その一方で、突かれに突かれまくっている下半身はとんでもないことになっていた。

魔物が腰を振る動きに合わせて、スカーレットの腹部がまるで生き物のように激しく隆起して、魔物ペニスの形にスカーレットの膣肉を形成してゆく。そして肉棒が引き抜かれるつど、マン肉が裏返り、外に飛び出して、びしゃびしゃと愛液を周囲に撒き散らしてやまない。魔物の剛直が胎を突くつど、ぐちゃぐちゃというおどましく卑猥な音が響き渡る

のは、膾炙だけでなく、内臓すらも押し潰すような勢いで胎の中が掻き混ぜられている証拠なのだが、だからと言って魔物が容赦する気配は微塵も感じられなかった。

その体格差から、性行為というよりはむしろ人形を使った自慰行為に近い挿入運動の連続は、次第にその速度と勢いを増しているようで、より激しくなる一方だ。

ズグツ、ズブツ、ズドツ、ズブツ、スグウツ、ズグウウツ、ズグウウ
ウツ！

肉の質を感じられる卑猥な音が響き渡り、心なしか、魔物もスカールレ
ットを犯すことに快感を覚えはじめているようだ。

その証拠に、内側から込みあがってくる欲状を抑制した声で、魔物がスカーレットに囁くように問いかけた。

「ド、ドウダ……コレガ才前ガ望ンダコトダ。氣持チイイカ、ンン？」

それに対するスカーレットの返答は、肉欲に身を委ね、蕩けきった、完全に頭が沸騰したとは思えない、欲情に満ち満ちたものであった。

「んほおおおおおおおおおおおおおッッッ！ しゅ、しゅごいッ、しゅごいです、旦那さまッ！ こ、こんなッ、こんな

感覚ッ、こんな快樂ッッ、生まれて初めてッ、経験しましたああああ
 ああああああああああああああああああああああああああああああ
 むほおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ

ツッ！ イク ウツ、イクイクイク ウウウウウウウウウウウウ
ウウウツツッ！ イツぢやううううううううううううううう
ううううううツツッ！ わ、わたしッ、初めてのセ○クスなのにッ、何

[illegible]

凄いですッ、旦那さまッ、もつとツ、もつと激しくツ、もつと強くツ、肉欲赴くままッ、スカーレットをめちやくちに犯してくださいやいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい

